

レジナレス・ワールドⅢ

Regginaless-World III



主な登場人物

????

ゲーム時代から時折その姿を見せていた
ダークエルフ。所属や目的などすべてが
謎に包まれている。

クリステル

ハイエルフの精霊使い。
ザフィアの姉。
強力な精霊魔法を操る。

アリシア

獣人族の族長の娘。
武器の扱いに優れ、
薬草の知識も豊富。

ジルベル

強大な力を誇る銀魔狼。
シュウの窮地を救い
仲間になる。
人化はお手の物。

ザフィア

エルフ族を率いる若きハイエルフ。
シュウに命を助けられ、世界樹を
まも
護っている。

シュネ

穏やかで知性に優れる白竜の娘。
とある事情で一族とはぐれてしまう。
真の姿は白く巨大な竜。

シュウ

本編の主人公。
“黒竜殺し”の二つ名を持つ
最強剣士。
『世界樹の守護者』となる。

サラ

シュウの幼なじみで共に
VR-MMO世界に転生する。
ホーリー・ナイト
“舞姫”と呼ばれる『聖騎士』。

レジナレス大陸



ホルベール王国

ネクアーエルフ
大森林
エルフの村 ●

商都エベルパツヒ

●ラトム 竜の巣

●マローレン

●「始まりの街」
聖都レオナレル

神聖ネカスタイネレ

●レリウ

ノイスバイン王国

●廃村

●ライダン

●サステオ

●王都バインスタイン

ネッカーゲムント王国

旧オルトラ
大公国

ヒルゼルブルツ王国

●王都ヘルプロシ

●港町ベルミュンデ

ネッカーブengel王国

●王都アルボルグ

●獣人族の村

インズルビベ

●遺跡

●海賊の根城

地下迷宮

●ブシフハルム

●ウーゲル

レジナレス大陸のほぼ中央に位置する聖都レオナレルは、標高の高さが影響して秋が短い。

しかし、実りの季節は短くとも食卓の彩りは豊かだ。大陸全土からの流通が盛んなため、東西南北ほぼすべての食材が集まってくる。

シュウ商会の邸宅では、そうした食材からさらに厳選した山海の恵みを料理に用いていた。商会の本業であるホテルで供される食事は、この都市——つまりはこの世界で屈指の美食を誇るため、邸宅で暮らす面々も同様に、華美で、優雅で、豊富なメニューを享受しているのだ。

穏やかな秋の陽光が降りそぐテラス式の食堂で、シュウと仲間たちは、のんびりとそんな昼食を楽しんでいた。

——あれ？ シュウ様はいつ帰ってきたんだろう？

ふと、違和感を覚えるシュネ。首を傾げながらも、自分の前にだけ置かれた、牛ロースを丸ごと使った巨大なステーキにナイフを入れようした。

すると、誰かが廊下のほうから呼びかけてくるのが聞こえた。

周囲を見回すが、サラもシュウも、アリシアもクリステルも、それに気付いてはいないようだった。シュネはフォークとナイフを皿に置き、立ち上がって廊下に歩いていく。

轟ッ。

背中から強烈な風圧を感じた瞬間、廊下であつたはずの目の前の風景が、竜の巢の——あの忌まわしい場面が変わっていた。

「お姉ちゃん！ 助けて！」

悲痛な声に振り返ると、白竜の姿をした妹が、瘴気を噴き上げる地脈の縦穴に、今まさに呑み込まれるところだった。

「……！ 待って！」

慌てて駆け寄ろうとするが、自身も瘴気に冒され、体が思うように動かなかつた。

「待って！ 待って！」

それでもシュネは何とか妹を助けようと、穴の縁に必死でしがみつく妹の元へ、這って近付いていく。

だが、ほんの一足の差で妹の手は縁から滑り、瘴気と闇に支配された地脈の穴に消えてしまった——。

「——ッ！」

冷たい汗がシュネの全身を冷やしていた。

「シュネ？」

叫びながらベッドの上で跳ね上がったシュネの肩を、温かい感触が優しく包む。

「サラ様……」

パジャマ姿のサラは、シュネの異変に気付き、様子を見に来ていたのだ。

「悪い夢でも見たの？」

「妹が……家族が地脈に吞まれた時の夢を見ました。『お姉ちゃん……助けて』って」

普段は押し隠している悲しみが、無防備に溢れ出るのをシュネは抑えられなかった。

激しく嗚咽するシュネの横に腰掛け、サラはシュネをそっと抱きしめる。

シュネは、ひとしきりサラの胸で泣き、しばらくして、やっと浅い眠りにつくことが出来た。

冷え切った体は、サラの優しさで温かさを取り戻していた。



ノイスバイン、ヒルゼルブルツという二大王国の王都で王立ホテルを譲渡されたシュウと、執事長兼シュウ商会支配人のラルスは、約束の日を迎えに来たシュネの背に乗って、レオナレルの邸宅に戻った。

数日後の昼下がり、大陸各所からの報告をまとめたラルスが、シュウのところにやって来た。うすたかく積み上げられた羊皮紙の報告書と一緒に。

ほんの一瞬イヤそうな顔をしたシュウを見たラルスは、にやりと笑った。

「シュウ様、すっかりご決裁いただきませんと」

このところ、シュウは買い取った鍛冶場に入り浸って、なにやら朝から晩まで作業をしている。そこでラルスは先回りし、昼食後すぐにシュウの首根っこを押さえたのだった。

「へえ、ベンノーとアルマに？」

「はい。商都エベルバッヒのホテル・レオナレル内で、武器の商いを任せようと思います」

ベンノーとアルマは、かつてアンセリ村の近くで強盗団を殲滅した折、シュウが雇った若者だ。故郷の村を滅ぼされた彼らは、「読み書きが出来る」という理由で殺されず、奴隷として売られようとしていたところをシュウたちに助けられ、レオナレルまでの旅に同道した。

下働きのつもりだった二人にとって、シュウが示した待遇は信じられないほど手厚いもので、彼らはどうにかシュウに恩を返したいと考えていた。

シュウはそんな二人を、後継者に恵まれず廃業しようとしていた鍛冶屋の老夫婦に預けて、武器商としてのノウハウを学ばせることにしたのだ。

「でも、親方さんがよく『うん』って言ったね？」

「彼らも夫婦揃ってエベルバッヒに移り、ベンノーたちを監督していくようです。今では、もうまるで親子のようです……」

「そうか。あ、親方さんの鍛冶場と店はどうするの？」

「畳むそうです。私が思うに、今シュウ様がお使いの鍛冶場のほうが大型で立地もよいので、シュウ商会では引き取らずにおこうと思います。とはいえ、評判のいい店でしたから、買い手はすぐに見つかるでしょう」

シュウがレオナレルに初めて来た時に買った鍛冶場は、先頃改装が終わっていた。併設の店舗も表通りに軒を並べる形になる。そちらも、開店すれば多くの集客が見込めるだろう。

「じゃあ誰か、レオナレルの鍛冶屋と武器屋を任せられる人材を見つけないとね」

「工芸ギルドのザール殿に相談したところ、ヤルモという腕のいい鍛冶職人が見つかりました。商才はなかったようですが、目利きは確かだと、ザール殿自身が請け負ってくださいています」

「うーん。じゃあ店の営業はウチから人を回して、職人としてその人を雇おう。給料とか待遇とかはラルスに任せていい？」

「心得ました」

ラルスはそう言うと、別の書類を手にとった。

「次に、ラドムの村からエルフの里への街道です。ひとまず、大型の馬車が通行できるくらいまで

整いました」

「ご苦勞様。働いている人たちは？」

「ラドムの村人たちは、そのままラドム開拓も手伝ってくださるようです。シュウ商会から派遣していた、本来ホテルで働く予定だった人材は、エベルバツヒでのホテル開業に合わせ、引き揚げます」

「そっか……やっぱりラドムにもホテルと商館が欲しいね」

「ホテルと商館……ですか？」

ラルスが考え込む。

「大変？」

「そこまでの新規建築となりますと、任せられる者は限られます」

「エベルバツヒのホテル改築を請けてくれた職人は？」

「そうですね。彼らに頼めば喜ばれるでしょう。一仕事終わって、次の仕事を待っておりましようから。問題は、設計や街割です」

街割——都市計画のことだろう。シュウは、改めてラルスの洞察力に感謝した。

「なるほど……誰かいい人ついでいそう？」

「いつそのこと、この一件、ザール殿にお任せしてみてはいかがでしょう？」

ラルスの見立てでは、ザールはレオナレルでもっとも優れた工人だった。だが、生来のまっすぐな氣質と物怖じしない口先が災いし、いつまで経ってもレオナレルの工芸ギルドの長、イエフのよ

うな小物の下に甘んじている。

「そっか、じゃあもしザールが引き受けてくれるなら、お願いしてみよう」

「承知いたしました」

ノイスバイン、ヒルゼルブルツ両国におけるシュウ商会の代表者や、ホテル支配人の人選などを終え、ふと気付くと、厨房から香ばしいパンの匂いが漂う時間になった。

「そうだラルス。ネクアーエルの森の東に宿場町を作る件も、ザールに相談しといてよ」

「それは……本気だったのですか？」

「うん。レオナレル、ラドム、エベルバツヒ、エルフの村……そういった街を行き来するのに、必ず必要になるから。ちょうどいい距離なんだよ？」

それはシュウの言う通りだ。ラルスも馬車で忙しくその一帯を駆け巡っているのでよくわかる。

だが、シュウの企画する開発・開拓のペースは驚くほど早い。慎重なラルスにとっては、大きなプレッシャーを感じずにはられない。

ホテル事業、武器商、馬産畜産も順調で、現在のところは黒字である。

武器商は、シュウやサラが大量に放出したゲーム時代の武器や防具、シュネから譲り受けた竜の巣に残されていた武器や防具、財宝のたぐいが大きな収益につながっている。

シュウが各王家から下賜されたホテルの資産価値も大きい。本格的な営業が始まれば、それぞれ

レオナレルの本店に匹敵する収益が見込めるだろう。加えて、もうじきエベルバッヒのホテルも開業するのだ。

資金的にはおそらく問題ない。シュウ商会の規模は、すでにこの世界の商人の中でも、トップクラスになっている。

「難しい？」

シュウがラルスの顔をちらつと見て聞いた。二人は食堂に向かいながらも打ち合わせを続けている。

「いえ……それで、宿場町の規模はどのくらいをお考えでしょうか？」

「うーん。馬車に乗った行商人のグループが五〜六台分と、徒歩の商人が十組くらい同時に泊まれるような？」

「となりますと、ホテル・レオナレルではその……」

格式が低く、マイナスイメージになるのだろう。ラルスが表情を曇らせた。

「なら、別のホテル名を付けたらいいよ。あそこはきつと栄えるよ？」

「なるほど、ご慧眼ですな」

ラルスは今さらながらに、この目の前の少年の、商業に対する嗅覚に感心する。

一般に、武人や貴人、それに冒険者などは、商業的センスの欠片もない者が多い。

しかし、シュウやサラには深い商業知識があった。身分のない自由な商業社会から来た二人は、レジナレス世界のような封建的なシステムの中でも、束縛されないモノの見方が出来ている、ということなのだろう。

「そうそう。ラドムに馬を届けたインゴが、レオナレル近くの牧場をラドムに移したい、と言っておりました」

「どうして？」

「一つには、環境がこの近辺より馬の育成に適している、ということでしょうか……」

「他にもあるの？」

「……食堂に着きました。その話はまたいずれ」

「うん、まあそういうことなら牧場の移設も考えようか。どうせ酪農もやる予定だからさ」

「承知いたしました」

シュウ、サラ、ジルベル、クリステル、ザフィア、シュネ、アリシア——一同揃つての賑やかな食事が終わった。

ジルベルは小春日和の庭先で昼寝。サラはアリシアを連れて、聖都見物を兼ねて買い物だそう。クリステルとザフィアはそれぞれ、エルフの里と竜の巣の開拓地へと旅立つことになっていた。

シュネは、そんなエルフの姉弟を背に乗せ飛び立っていく。

「じゃあラルス、あとはお願いね」

シュウはそう言い残すと、またも鍛冶場の工房に消えていった。



半ば^{なか}むりやりサラに引きずられる形で、アリシアはレオナレルの街を散策していた。

人間の街を歩く時の常で、はじめは例のフード付きのコートを被^{かぶ}つてサラの部屋に行った。

しかし、その格好を見るとサラは不機嫌になり、「ダメよ、そんな格好」と言った。

「や、やはり悪目立ちしすぎるだろうか？」

アリシアは、聖都のおしゃれで華^{はな}やいだ雰囲気の中で、さすがにこの格好は怪しいかも……と思っていた。

「うーん。って言うより、かわいくない！」

サラはあつという間にアリシアからコートをはぎ取る。そして普段通りのキュロットに、半袖の上着を着たアリシアを見て、満足そうにうなずいた。

「やっぱりアリシアはこうでなくっちゃ！」

「……いや、でも」

アリシアが気^き後^ごれしているのは、レオナレルが華美な都会だからだけではない。自身が獣人族で

あることが一番大きな理由だった。

人間の中には、獣人族を敵視したり、あからさまに蔑^{べつ}視^ししてくる者たちが多い。

アリシアは初めて人間社会に出た時から、不特定多数の人間がいる場所では、一度としてフードを脱いだことはなかった。それは、先人の教えから得た結論でもある。

「いいの、アリシアはすごくかわいいんだから！」

だが、瞳を輝かせて断言するサラを見て、アリシアは気乗りしないものの、この格好で歩いてみようかと思いついていた。もしかしたら、心の奥底で、萎^い縮^{しゆく}しないで街を歩く自分というもののへの渴望^{かうぼう}があったのかもしれない。

「まずはここにしましょ」

サラがアリシアを連れてきたのは、ボーイッシュな格好のアリシアより、ワンピースのロングスカートのサラに相^あ応^{おう}しいような、オーダーメイドの婦人服店だった。

「いらつしやいま……せ」

中年女性の店員の作り笑顔がこわばった。目線でアリシアを示しながら、小声でサラに「お連れ様でしょうか？」と尋ねる。

その視線で、早くもアリシアはこの姿で来たことを後悔したが、サラはまったく意に介^{かい}さなかった。「ええ、今日は彼女の服を注文にきました。採^{さい}寸^{すん}とデザインのほう、お願いしますね」

「お……お待ちください」

女性店員はサラの言葉を聞くと、そそくさと奥に下がった。

やがて、店主らしき初老の男が愛想^{あいそ}笑いを浮かべつつ、二人の元にやってくる。

店主はちなりともアリシアを見ず、サラに向かって冷たく告げた。

「申し訳ありません、お嬢様。当店はそれなりのご身分のお得意様に向けた注文服のみを扱っておりです。拝見したところ、あちらのお客様では、いささか分不相^{ぶんふ}応^{おう}かとお見受けしますが？」

「支払いなら問題ないですけど？」

「そういう問題でもございませんでな」

サラより少し背の高い太り気味の店主は、サラを見下ろしたまま言い放つ。

「私どもの服をまとう——そのことがお客様の誇^{ほこ}りにもなっておりますから。その、あちらのようなお客様が着てしまつては……」

ブランドに傷がつく、とでも言いたいのだろう。

サラの頭に、かっ^おと血が上^ぼった。

「わかりました。じゃあ結構です」

硬い表情で立ち去ろうとするサラに、店主は一言付け加えるのを忘れなかった。

「どうしても仰^{おつ}るのでしたら、それなりのお方のご紹介をいただけましたら——」

だが、すでに背を向けて歩き出していたサラは、その言葉を最後まで聞くことなく、アリシアの

手を引いて店を去った。

その後、二人はほかの店でも同じような不快な思いをすることになり、さすがのサラもうなだれてしまう。まともに買い物が出来たのは、武器屋と道具屋くらいのものであった。

シュウが夕方に鍛冶場から帰ってくると、珍しく食堂にサラの姿がなかった。

無関心を装っているが、ジルベルもサラのことを心配しているのか、少しそわそわしている。

アリシアが、食堂に入ってきたシュウに駆け寄ってきた。

細かい状況をアリシアから聞くと、ほんの一瞬シュウの顔色が変わる。しかし、すぐに優しい表情に戻ると、ぼんぼんと軽くアリシアの頭を叩いた。

そして、「わかった。ちょっと待っててね」と言い残し、サラの居室に向かつていった。

「大丈夫かな？」

アリシアがぼつりとこぼす。

「大丈夫である。オスがメスをなぐさめる方法なら、山ほどあるゆえな」

普段から周囲に無関心なジルベルにしては珍しく、世間話のようにアリシアの言葉を継いだ。優しくサラをなぐさめるシュウの姿を想像し、むう、とアリシアは表情をゆがめてしまう。

しかしアリシアも、自分が人間たちから差別的に扱われたことより、それによってサラが傷つい

てしまったことのほうが気がかりだった。自分のことでそこまで感情を動かしてくれたサラに、心の底から感謝していたし、心配せずにはいられなかった。

シュウがサラの部屋に消えてほんの数分後。

ものすごい勢いでボタンツと扉が開いたかと思うと、食堂から廊下の様子を窺^{うかが}っていたアリシアに向かって、恐ろしい勢いでサラが駆け寄ってきた。

そして、驚いているアリシアをぎゅっと抱きしめる。

「ごめん、心配かけたのね！」

「むぎゅ〜!?」

相変わらず力任せに抱きしめられて、アリシアは嬉しいやら苦しいやらで、目を白黒させていた。そして、二言三言、サラとアリシアは言葉を交わす。

目を真っ赤にしたサラと、それにつられて涙ぐんでいるアリシアを、少し離れたところからシュウとジルベルが眺めていた。

「他になぐさめようもあるうに、あひまようじ荒療治したのかの？」

「うーん、どうかな？ 僕はただ理由を聞いて、アリシアがサラを心配してションボリしてるよって伝えただけだよ」

「ほう。これで一件落着かの？」

「まさか」

にやりとシュウは笑った。

「きっちり落とし前をつけさせてもらうよ。僕の家族を泣かせたんだから、ね？」

夕食時に慌ただしく戻ったラルスは、メイドから伝言を受け、食堂に向かった。

「なにやらご用ですとか？」

シュウが真剣な顔で答える。

「うん、食べ終わったらちよっと話がある。商業ギルドのベーゼルスさん宛に一筆書いてもらいたいんだ。すぐに届けるから馬の用意もさせといて？ あと、サラとカタジーナにも同席して欲しい」

「承知しました。執務室でお待ちしております」

何かか？ と少し不安になりながら、ラルスはメイド長のカタジーナにちらっと目で合図して出ていった。



翌日。

昼下がりに、にこにこ微笑みながら、高級仕立て婦人服の店を訪れた貴人がいた。

聖都レオナレル屈指^{くし}の豪商で、レジナレス大陸でも三指に入る富豪である。

当然この店の店主にとつても、レオナレル商業ギルド序列一位の彼は憧れと羨望の対象だ。

「これはこれはベーゼルス様。ようこそおいでくださいました」

美しい白銀飾りの二頭立て馬車から颯爽と降りてくる老年の紳士に、店主はこれ以上ないほどの愛想笑いを浮かべ、揉み手をしながら近付く。

店主の両側には、この店の従業員が全員整列していた。

ベーゼルスの後ろでは、高級服に身をまとっているものの、どう見てもおまけのようにしか見えない少年が、うつすらと笑みを浮かべていた。

「？」

店主は一瞬困ったような表情で少年を見てから、ベーゼルスを窺った。

「おお、そうだ。店主、紹介しよう」

その視線に気付き、ベーゼルスは大仰に立ち止まって振り返る。

「こちらはシュウ殿。このたび、ギルドの序列二位となられた」

ベーゼルスは後ろのシュウが追いつくのを待って、左手でその背中を押し、店主の前で引き合わせた。

「よろしく」

シュウは、少年独特のさわやかな笑顔で店主に握手を求める。

店主はうやうやしくシュウの手を取り、「こちらこそ、今後ともお見知りおき願えば光栄です」

とそつなく受け答えた。

「序列二位と申しますと、その……ホテル・レオナレルの？」

「そうだ、オーナーだ」

ベーゼルスがうなづく。

「こんなお若い方だったのですか……」

店主は、驚きながらシュウをマジマジと見た。

「店主、若いからといってあなどらんほうが良いぞ？ シュウ殿はな、商會を立ち上げるや否や、敵対していたオルトラ公イエルセンを叩き出し、ホテル・レオナレルを手中に収めた。それを皮切りに、まだ半年と経たぬ間にエベルバッヒ、ノイスバイン、ヒルゼルブルツにもホテルを構えたお方だ。それに、商売だけではないぞ」

にやりと笑ってベーゼルスは続ける。

「冒険者としての名声も高い」

「は、はい……その、黒竜殺し」

その噂は今、レオナレルの上流社会でも話題になっていた。

ノイスバインのエガルド王がシュウの活躍を気に入り、個人的に身分を保障したり、ホテルを与えて報いているという。

しかも、最近聞かれるようになった話では、ヒルゼルブルツでも功績があり、王家からホテルが

下賜^かされたということだった。

「しかしベールズ様、シユウ様。私どもは婦人服の仕立てを生業^{なりわい}としております。今日はどのようなご用件で？」

「あ、今日は僕じゃないんです」

そこに、ベールズの馬車とはまた違った、豪華な四人乗りの馬車がやってきた。

白銀をあしらったベールズの馬車と違い、黄金の象嵌^{ずうがん}で車体を飾っているが、下品にならない見事なデザインの四頭引き馬車。レオナレルの住人なら知らぬものはない、ホテル・レオナレルの馬車だ。

停止すると御者がさつと降り、扉を開けて低頭する。

中からまず出てきたのはラルスだ。彼は続いて降りてきた女性に、絶妙なタイミングで傘を差した。「ありがとう」

優雅にラルスに礼を言ったその女性——サラを見て、「ほう」と女店員の誰かがため息をついた。そのまま王宮に行っても通用しそうなサラのドレスは腰高で、素材の良さと仕立ての見事さが際立つクリーム色の絹地^{きぬじ}が、陽光できらきらと光っている。

胸元にあるコサージュの留め金はブラチナで、贅沢^{ぜいたく}にサファイアで彩られている。

そしてなんと、言っても圧巻^{あつかん}なのが、イヤリングの宝石と、頭のティアラだった。

とくに純銀に数個のルビーがあしらわれたティアラは、サラの青みがかったブロンドの髪をゴ—

ジャスに演出している。

ラルスの傘の下を歩くその姿には、気品^{あひ}が溢^{あふ}れていた。

続いて、この店の店員の良く見知った顔——カタジーナが現れる。

カタジーナは、ラルスと同じく、あとから来る女性のために日傘^{ひがさ}を差した。

「う……」

店主が、最後に現れた女性を見て声を詰まらせる。

「あ、ありがとう」

カタジーナにそう声をかけ傘の下を歩くのは、昨日店主が冷たく追い出した獣人族の娘——アリシアだった。

両サイドに並んで道を作る店員の女性たちも、それを見て固まっていた。

いつの間にか、近所から多数の野次馬^{やじうま}が集まっている。

「ご紹介しよう。こちらはサラ様。シユウ商会のシユウ殿のパートナーであられる」

「う……は、はじめまして」

ベールズからの紹介に、やっとの思いで店主は声を出した。しかし、「あら、昨日もお会いしていますよ？」とにこやかに受け答えるサラの前に、ぐびりと息を呑む。

「店主？ サラ様はただの女性ではないぞ。シユウ殿の“黒竜殺し”と同じく、冒険者としての二つ名さえお持ちの方だ」

「ま……舞姫^{まいひめ}」？

「そうだ。決して無礼などせず、ひいきにしてもらうと良い」

「サラへの非礼は、僕たちへの挑戦みたいなものです。きつと大丈夫ですよ、ベーゼルスさん」
シュウも笑いながらダメ押しする。

「それもそうだな、わっははは」

ベーゼルスがわざと大声で周囲に声を響かせた。

それを聞いた野次馬たちがざわめき出す。鎧姿や普段着のサラに見覚えのある者もいたが、彼らでさえ、やや興奮気味に、ドレスアップしたサラの美しさについて語り合っていた。

「さて店主、最後に紹介しよう。アリシア様だ」

「ア、アリシア……さま？」

「彼女もシュウ殿のパートナーのお一人だ。獣人族の前族長、パール殿の一人娘で、現族長のゼク殿の妹御であらせられる。また我々にとっては、『獣人族の秘薬』と名高い薬の、元締め^{もとじ}のようなお方だ。決して粗相^{そそう}などないよう……おや、どうした店主？」

すでにショックで固まっていた店主は、ベーゼルスの説明を聞くと、へなへなと座り込んでしまった。

やがて店主が我に返ると、店員たちはサラとアリシアを店内に案内し、採寸したり生地を合わせ

たりし始めた。男性陣は客をもてなすラウンジに通されて、談笑している。

「そうか、昨日そんなことがあったか」

ベーゼルスがわざとらしく、重々しく言った。

「は、はい。誠にもって恥じ入る次第で……」

店主は深々とシュウに頭を下げる。

「これからは、サラにもアリシアにもこれくらいの対応をお願いしますね？」

シュウはそう言いながら、外の野次馬に目をやる。

この様子では、アリシアの噂も一両日で街中に知れ渡るだろう。反対に暮らしにくくならなければいいな……とシュウは思った。

「しかし店主、危うかったな？」

「は、はあ……」

「ホテル・レオナレルに目をつけられれば、この街で婦人服の仕立てなど、もう出来まいよ。それに、獣人族の秘薬の流通が止められでもしたら、どう責任を取ったもんだらうな？」

いたずらっ子のような表情で、ベーゼルスはまだこの店主を責めている。

「そ、そんなー！」

真っ青になって救いの瞳を向けてくる店主に、シュウは「もういいですよ。これからはよろしくお願いします」と慰め^{なぐさ}の言葉をかけた。

立ち読みサンプル はここまで

それからサラとアリシアは、レオナレルの高級店を何軒も回ることにした。
それからサラとアリシアは、レオナレルの高級店を何軒も回ることにした。
罪滅ぼしのつもりなのか、仕立屋の店主が二人を案内してくれたので、シュウとベーゼルスは先に引き揚げる。

そのあとはサラの独壇場だった。

緊張で固まっていたアリシアは、着せ替え人形のように下着からドレス、宝飾品、帽子や手袋といった小物にいたるまで、次々と試着させられた。そのたびににんまりとご満悦のサラ。

あまりに「かわいい、かわいい」と連呼して喜ぶので、本当はへとへとに疲れ果てていたが、アリシアは最後までつきあった。

帰ってから思い返しても、アリシアにとって、まるで夢のようなひと時だった。



「ちょっと体調悪いから、昨日の買い物荷物の荷物、悪いけど引き取ってきてくれないかな？ カタジーナと二人でさ」

翌日、朝食後にサラからそう頼まれたアリシアは、今日も馬車で街に出かけていった。

